

特集「東南アジアを超えて 華僑・華人史研究のフロンティア」によせて

小 泉 順 子*

本特集は、2005年9月5日から7日の3日間にわたり、東南アジア研究所にて開催された第29回「東南アジアセミナー」『東南アジアを超えて 華僑・華人研究のフロンティア』における報告、および討論を踏まえ、その過程で提起された諸問題の中から特に歴史、研究史に焦点を当てた論考を中心に編まれたものである。

近年、グローバル化の新たな動きの中で、地域をめぐる区分が流動化し、これに対応して「東アジア共同体」といった新しい地域政策などが提起される反面、「東南アジア」なる地域概念の意義が薄れてきているという懸念も表明される。同時に、東南アジア各地で中国問題・中国要素が複合的に登場するようになり、それに伴い、東南アジア・中国双方で、華僑・華人に対する新たな関心が生まれている。2005年度の「東南アジアセミナー」では、このような現状を踏まえ、この「地域」の流動化と新しい華僑・華人・中国要素の展開を、相互に連動した動きとして捉え、地域やディシプリンを超えた議論の場から、「東南アジア研究」と「華僑・華人研究」の新たな課題や今後の可能性を探ることを目的とした。

そこで設定された主たる問題は以下の2点であった。まず、これまで研究の前提として自明視されてきた「東南アジア」という地域区分の再考である。これは、研究、とりわけ華僑や華人に関わる研究を企図するにあたり、課題を位置づけるべき枠組みとして、あるいは比較・対照を考えるべき区域として、あるいは追求すべきダイナミズムや構造を明らかにしうる「全体」として、「東南アジア」という枠を設定することは、いかなる意義を持つかという問いかけと言い換えることができよう。他方、さまざまな地域において、経済、政治、文化などあらゆる領域で多様なインターアクションを重ねてきた「華僑・華人」の全容は、「華僑・華人研究」と一括して対象化され、把握されるべきか、という問題も課題とされた。別言すれば、「華僑・華人研究」という独立した研究領域が存在し、独自の研究方法があると考えられるのか否か、そして近年の新しい動きは、旧来の研究にいかなる問題を提起し、現在、最先端の研究はいかなる方向に展開しつつあるかという問題の検討である。

このように地域、ディシプリン、方法にかかわる根本的な問いかけを基本に据え、3日間のプログラムでは(1)現実の新たな展開を見据えつつ、(2)研究の方法をめぐる新たな問題提

* 京都大学東南アジア研究所；Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

起を論じ(3)同時に研究史を批判的に見直す,という3つの課題に取り組んだ。

その中から本特集は,特にこの(3)にあたる歴史,とりわけ研究史に関わる議論をとりあげている。背景には,近年表出する華僑・華人をめぐる新たな動きに関する研究をみれば,事実,圧倒的に多くの現状報告や現状調査が進められているが,あたかもそれは膨大な数にのぼる個々のケーススタディの集積であるかのように見え,むしろ状況が先行し,研究が追いついていない状況であるともいえるように思われるという認識がある。このような現状に対し,今一度華僑・華人研究の研究史的成り立ちの原点に立ち返り,その成り立ちを解きほぐし,展開過程を振り返りながら,かつ現在の華僑・華人ならびに中国要素に関する課題的・方法的把握の需要の増大に応える新たな視座の模索が必要ではないだろうか。

このような現状認識と問題意識に導かれ,本特集では,研究史整理のうえに立ち,これまでの研究の展開を見据えつつ,今後の課題や方向性を,方法とその枠組みを意識しつつ提起すること 別言すれば,「華僑・華人研究」の研究状況を,歴史的に,また現代的に捉えなおし,地域という問題と相関させながら相対化すること を目的とした。以下,各論考は,それぞれの専門テーマについて,研究史的な回顧と現在の研究状況の紹介,従来の研究を再考する視角と問題意識の提起という課題に取り組み,同時にこれまでの議論の展開過程における基本的な「論点」「論者」,および参考文献の紹介と検討を通してこの課題にアプローチする。

巻頭「華僑・華人史研究をめぐる東南アジアと東アジアの連続と断絶」(濱下武志)は,活発化する華僑・華人研究を見渡し,固定的研究対象というよりは問題の「表示板」としての華僑・華人研究の特徴と,それゆえに直面する研究の方法的困難 常にひとつの事例研究にとどまらざるを得ない を如何に克服するかを,「中国」という視野から近年の研究を振り返りながら探る。同時に,地域研究的な枠組みと,多様でネットワーク的な華僑・華人を対象とする研究との相互相対化という課題に向けて,日本という地域を如何に位置づけるかという課題を提起し,そこに見える日本,東南アジア,華僑・華人をめぐる研究上の断絶を指摘し,戦後世代の研究姿勢を問いかける。

続いて「ネットワーク,アイデンティティと華人研究 20世紀の東アジア地域秩序を再検討する」(劉宏・廖赤陽)は,過去20年間に興隆した華人ネットワーク論を広範に振り返り,従来の「制度対非制度」「ネットワーク対国家」などの二極分化の分析モデルから抜け出す枠組み,視角を探る。これまでに提起されたさまざまなネットワーク論に対する批判や反省(修正主義的展開)を踏まえて,今後「脱修正総合」へ向けた展望を,ネットワークの歴史化,空間化,制度化,限界性という4つの課題を提起しつつ議論している。

華僑・華人研究を横断的に見渡し,再検討する上記2編に対して,以下の論文は特定地域における研究の展開を扱う。まず「スペイン領フィリピンにおける『中国人』 “Sangley,” “Mestizo” および “Indio” のあいだ」(菅谷成子)は,スペイン領フィリピンにおける「中国

系メスティーソ」の歴史的諸相・位置づけをめぐる研究史を振り返りつつ、その生成の歴史的条件を中国人移民社会の変容を軸に再検討する中から、中国系メスティーソ社会の両義性、とりわけ女性の果たした機能を見直す必要性を提起する。また近年の「華僑・華人研究」の動向に対しては、フィリピン史の立場から、居住する「地」に根ざした視点と歴史的文脈に位置づける課題の重要性を指摘する。

他方「インドネシア華僑・華人研究史　スハルト時代から改革の時代への転換」(青木葉子)では、まずスハルト時代の研究史を①1965年前後、②1965年から70年代、③1980年代からスハルト体制末期までの3期に分け、それぞれの主要なテーマと作品を紹介しながら概観する。そしてスハルト退陣後、華人に対する差別的な政策に変化がみられる中で活発化する華僑・華人研究が重点を移しつつある新たな方向を考える。

さらに続く2編は、北米という場において生成した2つの異なる華僑・華人研究について、その研究史をそれぞれ歴史的文脈に位置づけつつ検討する。園田節子は、「北アメリカの華僑・華人研究　アジア系の歴史の創出とその模索」において「北アメリカの社会や地域性を反映した研究傾向をアメリカ現代史のなかで捉えなおして相対化」すべく、北アメリカの華僑・華人に関する歴史研究の誕生、そして新アプローチの成立・展開を検討する。まず90年代以降トランスナショナリズムの潮流が新たに開いた領域を概観し、次いでそれ以前の、国民国家を軸に中国アイデンティティの維持を強調するか、アメリカ市民への同化を必然視するかという2パラダイムに規定された研究の動向を、アメリカの移民政策、チャイナタウンの構造変化と知識人の果たす役割、アジア系アメリカ人を取り巻く社会運動の潮流などに絡めて描きだす。

また「タイ中国人社会研究の歴史性と地域性　冷戦期アメリカにおける華僑・華人研究と地域研究に関する一考察」(小泉順子)は、同じくアメリカという場で展開したタイの中国人をめぐる研究を再考する。スキナーにより提起された「同化」パラダイムの生成、展開の背景を、アメリカの「東南アジア研究」という学術の場、1950年代から60年代という時代、そして東南アジアとタイなる「地域」という相互に絡みあう3つの文脈において歴史化し、中国人社会研究と「地域研究」が、時代的前提を共有しながら表裏一体で展開した様を再検討する。

本特集は、特定の問題について実証的に結論を導くというよりは、問題提起的、課題開拓的であることを心がけている。また、一国、あるいは東南アジアという枠内の議論に限られがちであった本テーマにおいて、北米、中国などの視野と視点を取り込み、複眼的、複合的なアプローチを意識的に模索している。これらの論考を通して、それぞれの場に固有の中国人、華僑・華人の存在様態と、それに条件づけられ、研究が生成される場・時代に規定されて展開する個別研究史の特徴が見えてくると同時に、中国人・華僑・華人を取り巻く特定の歴史的契機や政治状況、文化的背景から導かれる地域を超えて比較可能な検討課題も浮かび上がるのではなからうか。広く読者からの批判を得て、さらなる議論の場が拓かれることを願う次第である。

Beyond Southeast Asia: New Perspectives on Overseas Chinese Studies through Historiographical Reflection

Preface

KOIZUMI Junko *

The following collection of six articles is a result of the presentations and discussions at the CSEAS Southeast Asia Seminar 2005, held between September 5 and 7 under the ambitious theme “Beyond Southeast Asia: New Perspectives on Overseas Chinese Studies.” The three-day seminar sought to promote cutting-edge scholarship on the questions of both Southeast Asia as a coherent region and the new dynamics of overseas Chinese communities.

Recent globalization has blurred the existing boundaries of long accepted areas such as Southeast Asia and East Asia. While the World Bank emphasizes the remarkable success of the increasingly integrated economies of the East Asia and Pacific region, including Southeast Asian countries, it is now openly claimed by some political leaders and policy makers in the region that the creation of an East Asian Community consisting of Japan, China, South Korea, and the 10 ASEAN members is fast becoming realistic. In reaction to such moves are voices expressing concern that Southeast Asia as a region may become less meaningful.

It is evident that today’s trans-regional processes of reconfiguration have largely been promoted by the “Rise of China.” While the role of overseas Chinese in accelerating the emergence of China as economic power is noted, Chinese factors and elements in various societies and in different dimensions within Southeast Asia have also come to be manifested more openly. This in turn has stimulated an increasing and fresh interest in the study of overseas Chinese in Southeast Asia in fields such as business networks, economic entrepreneurship, and cosmopolitan identity. Concurrently, there has been a remarkable revival of scholarly interest in Southeast Asia in Hong Kong, Taiwan, and in mainland China itself.

Taking the above two recent developments regarding emergent China and withering Southeast Asia as one concomitant/corresponding/inter-related phenomenon, this year’s SEA seminar examined the activities of overseas Chinese that extend beyond the region and by so doing reconsidered the ontological and methodological issues concerning both Southeast Asian Studies and overseas Chinese Studies. The latter stems from our particular concern that previous scholarship in the field, which tended to delineate a Chinese community as a distinctive object of study and only examined its uniqueness or assimilating aspects, is no

* Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

longer effective in light of the increasing complexity and depth of interaction among actors and groups which constitute societies and networks extending beyond one particular country and/or region under globalization.

Various problems were raised and discussed in the seminar, such as new developments in the relationships between Southeast Asia and East Asia, the possibilities and limitations of new methodologies/theories/perspectives proposed in recent studies, and critical reassessment and reconsideration of existing scholarship on overseas Chinese studies and Southeast Asian studies. The articles included here specifically address the historiography of existing studies. The theme stemmed from a shared appraisal of the present state of scholarship on overseas Chinese: although there has been a rapid and vast increase in the number of works in various fields and in different regions and countries, they tend to be an endless accumulation of case studies chasing after rapidly changing phenomena under a globalizing transnational situation rather than the opening of new theoretical ground. What is needed at this moment is to critically reflect upon the historiography of the field to uncover assumptions that have restricted the perspective of present scholarship.

Each article below will provide a critical review of the field of overseas Chinese in which the author is specialized. It will introduce important works which have made a special contribution and will place them in the historical and geographical contexts conditioned by specific political and social situations under which they were produced. Since the articles included here cover not only Southeast Asia but China, Japan, North America as well, we hope to generate discussions that interrogate and breach existing academic demarcations and boundaries.